

## 「海」概念の発達

大西文行（横浜市立大学国際文化学部）

目的：海は古来生命の源と言われている。日本においても海は重要なものであり、海について古くから関心が持たれてきたが、海への関心やかかわりについての心理学的、発達心理学的な研究は見られない。

ここでは海についての概念の発達とその文化差を考察することを目的にした。

方法：被験者：海との日常のかかわりと文化差を検討するために、下記の地区、学校、学年を対象にした。

地区	1年生	3年生	5年生
横浜/神奈川	162	124	159
箕輪/群馬	31	32	41
上海/中国	131	167	164

教示：対象校の各教室で、B4大の画用紙に、「海について思っていることを自由に描いて下さい」と教示した。教示者は担任である。着色は自由である。

分析：絵画は、人物、活動内容、海、波と空の様態、海岸、海と空での動植物、建造物などの28項目によりチェックした。色彩の分析はしていない。分析者は4名であり一致率は高かった（90%以上）。

結果と考察：

1 海の構成—児童が海をどのように概念化しているかについて、海原、海中、陸（海岸）を描いた率をまとめたのが、以下の結果である。

地区	学年	海原	海中	陸	空
横浜	1	77.9	22.7	41.7	47.9
	3	71.8	27.4	41.9	28.2
	5	51.9	49.8	23.7	52.5
群馬	1	90.6	6.3	21.9	37.5
	3	78.1	21.9	34.4	50.0
	5	90.0	12.5	32.5	67.5
上海	1	22.1	75.6	4.6	91.6
	3	78.4	24.0	18.5	85.0
	5	89.6	8.5	5.5	65.9

海原と海中を描く率に地区の差が見られる。横浜地区では、海原は高学年になるにつれて減少し、海中を描く率が増大する。

これらの項目の組合せ、すなわち、海（海原と海中）、海岸と空、での分析では、地区との主効果( $F=3.16$   $df=2$ )と地区と年齢の

## —日中比較—

長谷川真里（お茶の水女子大学人間文化研究科）

交互作用効果( $F=17.19$   $df=4$ )があった(いずれも  $P<.05$ )。

海を客体として意識すること（海原のみの描画）は、横浜地区に多く（各学年 10%以上）、上海地区では3年生以後である。群馬地区では、3年生で増加するが、5年次で減少している。海を主・客体で意識する（海原と海岸の描画）のは、横浜、群馬地区では多く、上海地区では少なくなっている。海を主客の全体として認識すること（海岸、海原と空の描画）は、横浜、上海地区の5年で最も少ない。海を主客の融合から分離へと認識することが見られ、その発達差は地区によって異なっている。

2：海との関わり—海に関わりを、描かれている人物の活動、構造物などから分析した。泳ぎ、ボート遊び、釣と砂遊びについてみると、水泳の描画は、横浜地区の一、3年、群馬地区の5年に多くみられる。ボート遊び等は、群馬地区1、5年に多く、砂遊びは横浜地区の各学年、群馬地区の5年に多く見られる。以上の項目については、上海地区はこれらの地区と比較して、描かれることは少ない。

海の描画様態では、海原、海中と海底が描かれている。横浜地区では、年齢と共に海中が、上海では、海原が多く描かれる。群馬地区では海原が各学年で多く描かれている。海中の描画では、哺乳類、魚介類が横浜地区の各学年で多く描かれるが、上海地区では学年と共に描かれることが少なくなっている。海原に描かれる船種では、遊興、客船および軍艦があり、上海地区では多く描かれ、遊興船の描画は学年と共に減少し、客船、軍艦の描画が多くなる。他の地区では、遊興船や客船の描画が見られるが、上海地区に比して少ない。

これらのことから、横浜地区では資源としての海を概念化しているが、上海地区では、主の拡張としての海を概念化していると言える。